

# 「七高僧<sup>しちこうそう</sup>⑦<sup>げんくう</sup>源空<sup>ほうねん</sup>(法然)<sup>しょうにん</sup>上人<sup>しょうにん</sup>について」

今回は、七高僧の7番目、第七祖で最後のお方、源空上人こと法然上人についてです。  
法然上人は浄土宗の開祖であり、親鸞聖人のお師匠さんです。

法然上人は、1133年に美作国<sup>みまさか</sup>（岡山県）に地方武士の子として生まれ、幼名<sup>ようみょう</sup>を勢至丸<sup>せいしまる</sup>といいます。

お父様は漆間時国<sup>うるまとときくに</sup>というお名前の代官・押領使<sup>おうりょうし</sup>（武力で悪い輩を鎮圧する治安維持の豪族、今のお巡りさんのような仕事）でした。

勢至丸が9歳の時に、お父様は抗争に巻き込まれて、怨みを抱いた者に殺されてしまいます。

お父様は臨終のときに、「仇討<sup>あだうち</sup>をしてはいけない。怨みに報いるに怨みをもってすれば、いつまでも争いは止まらない。出家して仏の道に入り、人を救う身となってくれ」という遺言を残します。  
勢至丸は父の遺言に従い、最初は地元・岡山にある寺で仏教を学び始めますが、才能が優れていたため、比叡山に移ることを勧められました。

13歳で比叡山<sup>じほうげんこう</sup>に上って持宝房源光に師事し、15歳で出家して、天台教学を学びました。

18歳の時には比叡山・西塔<sup>くろだに</sup>の黒谷<sup>いんせい</sup>に隠棲<sup>じげんぼうえいこう</sup>していた慈眼房叡空の弟子となり、源光と叡空から一字ずつを取って、法然房源空と名前を改めます。

比叡山西塔の黒谷は、名誉や地位を捨てて、真剣に道を求める念仏者が集まっていたところでした。

比叡山では「智慧第一の法然房」といわれた優秀な法然上人ですが、24歳の時に求道心から比叡山を下り

て、京都・洛西の嵯峨<sup>せいりょうじ</sup>にある清凉寺<sup>せいりょうじ</sup>釈迦堂に参籠した後、奈良の興福寺や醍醐<sup>おむろ</sup>、御室などを歴訪し、法相宗、三論宗、華嚴宗などの教義も学びます。

この旅から戻ると黒谷の経蔵にこもって、一切経を五度も読破したといわれます。

そして1175年、43歳の時に、善導大師<sup>かんぎょうしよ</sup>の『観経疏』にある「散善義」の文に出会って上人の心が晴れ、専修念仏に帰依されました。

そして比叡山を下りて、京都の東山にある吉水に草庵を設けて移り住み、あらゆる階層の人たちに浄土念仏の教えを広められました。

当時は、1156年から保元の乱、1160年から平治の乱が起こって戦乱が続き、また天災や飢饉・疫病などがしばしば起こり、人々は不安におののいていました。

1052年が末法の始まりとされますが、法然上人の時代には、末法思想がますます広がっていました。

そして南都（奈良）北嶺（比叡山）の仏教は、こうした人々を救う力がなくなっていました。

こうした状況の中で、法然上人の人柄や人格と信仰の力に感化され、その徳を慕って実に多くの人々が吉水に集まるようになります。

1186年、54歳の法然上人は京都の大原にある勝林院（三千院の少し奥にある）で、南都北嶺の高僧たちと浄土念仏の教義について問答します。

これは「大原問答」または「大原談義」と呼ばれ、各宗派の多くのお坊さんたちが参加しました。高僧方からの質問に対して、法然上人がお念仏の功德と阿弥陀仏の本願の深い趣旨を明らかにすると、聴衆一同は深く感銘を受けます。

そしてこれ以後、専修念仏が広まります。

1198年、法然上人は、66歳の時に関白の九条兼実の要請で、法然上人の主な著書である『**選択本願**

念仏集』二巻を著します。略して『**選択集**』ともいいます。

お念仏を称えることが、第十八願（本願）の行として選びとられたことを明らかにした書物です。

この書が開版されると、他宗から強い批判を浴びるほど話題になります。

建仁元年（1201年）、吉水の草庵で教えを説いておられた法然上人の元を、親鸞聖人が訪ねられます。

比叡山を下りて、百日の六角堂参籠を経て法然上人に出会われた親鸞聖人は、毎日毎日、吉水の草庵に通って教えを聞き、阿弥陀仏に対する純粋な信仰心が生まれました。

そして20年過ごした比叡山を去って、法然上人の門下に入られたのです。

親鸞聖人が29歳、法然上人が69歳の時でした。お二人は、ちょうど40歳年が離れています。

「**本師源空明仏教 憐愍善悪凡夫人**」

〈**本師源空は仏教にあきらかにして、善悪の凡夫人を憐愍し、**

《**本宗（真宗）の祖師である源空（法然）上人は、深く仏の教えをきわめられ、善人も悪人もすべて**

の凡夫を憐れんで（憐愍）、

「**真宗教証興片州 選択本願弘悪世**」

〈**真宗の教証を片州に興し、選択本願を悪世にひろむ。**

ここに出てくる「真宗」は「真実の教え」という意味で、宗派名ではありません。

「教証」は「教・行・証」を短く略したもので、教義全体を指します。

「片州」は片隅にある国ということで、日本のことです。

《アジアの片隅にある日本(片州)に往生浄土の真実の教え(真宗教証)を開いて明らかにされ、

選択本願の法(=第十八願)を乱れた悪世に広められました。》

**「還来生死輪転家 決以疑情為所止」**

《「生死輪転の家に還り来たることは、決するに疑情を以て所止となす。」

「還来」は行ったり戻ったりすることで、迷いの生死を繰り返すことです。

「生死輪転家」は、車輪が回るように、生まれては死に、死んでは生まれて、迷いの世界を流転してさまよっている住み家です。

「生死」は、迷っている状態、という意味になります。

「決するに」というのは、間違いないことだ、という意味です。

そしてこれは、阿弥陀仏の本願を疑うからなのです。

「所止」は、とどめさせられる、という意味です。

《「迷いの世界から抜けられずに輪廻し続けるのは、私たちの心にはたらく本願への疑い(疑情)によるのです。》

**「速入寂静無為楽 必以信心為能入」**

《「すみやかに寂静無為の楽に入ることは、かならず信心を以て能入となす」といえり。》

「寂静無為楽」の寂静と無為は、どちらも「涅槃」の別名で、さとりの世界のことで、

「楽」は、「都」のことです。

「能入」は、入っていくことができる、という意味です。

《「速やかにさとりの世界(寂静無為の楽)に入るには、ただ本願を信じるより他はありません」と

法然上人は述べられました。》

法然上人の念仏の教えは民衆の心をとらえ、大きく広まっていきました。

このため、伝統を重んじる南都・北嶺の僧侶たちからは、この新しい教えは邪教のように思われてしまいます。

比叡山延暦寺からは、念仏停止ちようじの声が上がります。

そこで法然上人は1204年、延暦寺の天台座主に宛てて『七箇条制誡しちかじようせいがい』を書いて、念仏者の行き過ぎた行為を制する釈明をされます。

しかしこの翌年、今度は奈良の興福寺が念仏停止ちようじを朝廷に奏上そうじようし、法然上人と門弟の処罰を要求します。

1206年には、後鳥羽上皇が熊野に参詣して不在の間に、法然上人門下の住蓮じゅうれんと安楽あんらくという二人の僧が東

山の鹿ヶ谷ししがたにで催した別時念仏べつじねんぶつ（特別に時間を定めて行う念仏）に、後鳥羽上皇の寵愛を受けて仕えていた

松虫と鈴虫という二人の宮廷女官が参加して、住蓮と安楽ろくじらいさんの六時礼讃の哀調に感銘を受けて出家してしまうという事件が起こります。（東山の鹿ヶ谷に「安楽寺」という松虫鈴虫ゆかりの寺があります）

後鳥羽上皇はこれを知って激怒し、建永2年けんえい（承元元年・1207年）、念仏停止令ねんぶつちようじれいを出して専修念仏は禁

止されて、75歳という高齢の法然上人は、藤井元彦もとひこという俗名で四国の土佐に流罪となります。

そして門弟のうち4人が死罪、7人が流罪となります。

この流罪となったうちの一人が、親鸞聖人でした。

親鸞聖人は藤井善信よしざねという俗名で越後（新潟県）へ流されます。これを「承元じようげんの法難」といいます。

親鸞聖人が法然上人を訪れてから流罪になるまで共に過ごした時間は、わずか六年の間でした。

流罪となった後は別れ別れとなり、お二人が二度と会うことはありませんでした。

この結果、吉水の教団は解散しますが、専修念仏は逆に少しも衰えず、流罪の結果、念仏が地方の人々にも広まることとなります。

土佐、実際には讃岐に流罪となった法然上人はその後許され、摂津（大阪）の勝尾寺かつおうじに4年ほどとどまった後、1211年、京都に還られます。

この翌年の建暦2年けんりやく（1212年）1月23日、「一枚起請文」を絶筆の遺言として、法然上人は1月25日に80歳で念仏の声とともに京都東山の東谷で往生されました。

「弘経大士宗師等ぐきようだいじしゅうしとう 拯济无边極濁悪じようさいむへんごくじよくあく」

ぐきょう だいじ しゅうしとう むへん ごくじよくあく じょうさい  
《弘経の大士・宗師等、無辺の極濁悪を拯済したもう。》

この句からは、『正信偈』全体の結びになります。

「弘経」は『仏説無量寿経』の趣旨を弘められた、という意味です。

「大士」は「菩薩」の中国語訳で、ここでは龍樹菩薩・天親菩薩のお二人のことです。

「宗師等」は、「真宗の祖師」ということで、中国の曇鸞大師、道綽禪師、善導大師の三人と、日本の源信僧都、源空（法然）上人のお二人の、計五人です。

ですから「弘経大士宗師等」は、「真実の経を弘められた七高僧」という意味です。

じょうさい  
「拯済」は、救い助けることです。

「無辺」は限りないことです。

「極濁悪」は五濁悪事悪世界の衆生のことです。

じょうど おし むりょうじゅきょう ひろ ぐきょう しんしゅう そしがた だいじしゅうしとう かずかぎ  
《浄土の教え（『無量寿経』）を広めてくださった（弘経）真宗の祖師方（大士宗師等）は、数限り  
ない（無辺）五濁の世の衆生をみなお救いに（拯済）なられます。》

どうぞく じしゅうぐどうしん ゆいかしんしこうそうせ  
「道俗時衆 共同心 唯可信斯高僧説」

どうぞく じしゅう どうしん こうそう せつ しん  
《道俗時衆とともに同心に、ただ、この高僧の説を信ずべし。》

「道」は僧侶、「俗」は在家の人のことで、「時衆」は、現在、道場に参集している人々、また広く今の世の人々のことをいいます。

「共同心」は、共に心をついに同じくして、という意味です。

「高僧説」は、七高僧の教えのことです。

しゅっけしや どう ざいけしや ぞく いま よ ひとひと じしゅう ぐどうしん  
《出家者（道）も在家者（俗）も今の世の人々（時衆）はみなともに心をつにして（共同心）、ただ  
この高僧方の教えを信じなさい。》

このようにして、親鸞聖人は『教行信証』行巻の最後で、『正信念仏偈』略称『正信偈』の「60行120句の偈（詩）」によって、お釈迦様から七人の高僧がたを経て親鸞聖人に伝えられてきた浄土念仏の信心をお勧めになりました。

これらの七人の高僧がたは、お念仏を称えることによってすべての罪深い一般の人々を救うために、この世に出られた方々です。

ですから親鸞聖人は、高僧がたの説かれたお念仏の道を信じなさいと、最後に言われたのです。

以上で、7回にわたった七高僧のお話を終わらせていただきます。